

『吉備・ヤマト相関図』

— 旧吉備王国・吉備王国系巫女神道とヤマト王権連合・『記紀』神話・六国史の歴史観の比較年表 — 旧吉備王国(郷里岡山県および兵庫県、広島県、山口県など山陽地方)系巫女神道・巫女歌道 令和新時代 最終協力版

平成9年 巫女、社家子女、歌道家子女らが歌書や神儒仏の秘伝奥義の岩崎への相伝を開始し、岩崎が継承と調査研究を開始
平成23年7月6日 岩崎が本資料を起筆
令和元年6月2日

著作権法および『岩崎純一全集』第6巻に基づき、協力者の著作部分に係る著作権の全部の岩崎への譲渡が完了したことをもって、本資料を公表するため、最も早期からの作成資料『旧派歌道・歌学の流派・家元・団体の総覧』の名称を『日本旧派歌道流派総覧』に変更し、これを母体として、本資料を含むその他の資料と合わせた『岡山県巫女特別協力資料』を設置
令和元年8月14日 公開、令和元年8月29日 最終更新

筆頭編著者： 岩崎 純一

(岩崎純一学術研究所所長、財団事務局長、大学非常勤講師等)

編集総本部： 岩崎純一学術研究所(IJAI)

編集作業： 同上第二学堂(『岩崎純一全集』編集学堂)第一学廊第一学館第四学庭

編集作業補助： 同上第二女子学堂(『岩崎純一全集』編集女子学堂)第一女子学廊第一女子学館第〇女子学庭～第九女子学庭

本資料群の編著者・協力者一覧

岩崎純一学術研究所(IJAI)
岡山県巫女特別協力資料

- (1)『日本神道道統図』(『全集』第14巻 別添資料)
- (2)『吉備・ヤマト相関図』(『全集』第14巻 別添資料)
- (3)『吉備巫女神道・ヤマト皇統相関系図』(『全集』第32巻 別添資料)
- (4)『日本旧派歌道流派総覧』(『全集』第92巻 別添資料)
- (5)『日本旧派歌道流派系統図』(『全集』第92巻 別添資料)

姉妹資料

- 『巫女神道比較表』(『全集』第14巻)
- 『巫女神道探訪記 - 日本的アニミズム感覚の源流を訪ねて -』(『全集』第14巻)
- 『大日本帝国陸軍歩兵第十連隊(岡山・鉄五四四八部隊)戦史調査資料』(『全集』第34巻)

岩崎純一学術研究所ウェブサイト
(本資料群の掲載場所)

<https://iwasakijunichi.net/>

※ なお、本資料群は、上掲の巫女や歌道子女らが所属する社家や神社、岩崎が協力している女子寮の閲覧室の一部でも入手できる。また、岩崎が非常勤講師や特別講師を務める大学の講義でも、適宜使用する。

[参考文献\(岡山県巫女特別協力資料の全資料の参考文献\)](#)

Copyright (C) 2012-2019 岩崎純一
All Rights Reserved.

序文 岩崎 純一 令和元年6月6日 筆

本資料の編著者である私・岩崎純一は、岡山県岡山市の西大寺地区の西部、芥子山(けしごやま)の麓に生まれた。

その岩崎が主宰する岩崎純一学術研究所(IJAI)とそのアーカイブ(IJCA)・『岩崎純一全集』(IJCW)は、序巻で解説した通り、あらゆる学術分野を扱っている。但し、IJAIの主要な構成員・共同編纂者のおよそ半数は、事実上、岩崎と同じ岡山県出身の巫女神道家・歌道家(女系)の子女で占められている。

むろん、これは岩崎の学術上の意向・方針と、これらの子女の皆様自身によるIJAIへの協力の要望を反映した結果ではある。しかしながらそもそも、これらの巫女神道家・社家は、京都の冷泉家のように、男系男子が途絶えたために婿養子を迎えたのではなく、最初から女系女子を当主とする卑弥呼流の鬼神道・呪道や巫女神楽・歌道の家として続いており、ただでさえ全国一の古代宗教・新宗教の発祥地である岡山県にあって、最古参の異彩を放っている。

これら吉備の巫女神道社家の巫女たちのお話を伺って早十数年になるが、これらの巫女たちは、巫女禁断令(1873、教部省発布、神霊の憑依などによって託宣を得る行為の禁止)と社家の世襲の廃止以降、このたびの平成から令和への代替わりに至るまで、宮中祭祀には巫女としてほとんど呼ばれていない。なぜならば、太古のシャーマニズム・鬼神道を基盤とし、磐座(いわくら)神事、巫女神楽、神剣演舞、歌垣などで構成される巫女神道は、男性神職が祝詞を唱える奉納祭祀を中心とする広義の神社神道(皇室神道、国家神道を含む)とは異なる神道流派、正確には「神道」成立前の「神の道・惟神道(かんながらのみち)」だからである。現在は、秘伝化して祭祀を行っている。

一方、右翼団体は憤怒に燃えるかもしれぬが、古代朝鮮(特に百済系)祭祀を継承する社家は、現皇統の重要儀式に呼ばれている。皇統と百済との血縁関係の深さからすれば、異様どころか自然のことである。昨今の日韓関係の悪化は、両国共に神道精神や考古学精神とは全く別のところから出た皮相浅薄の争いであって、私にとって特に見るべきものはないと感じる。この争いから超然とした現上皇・上皇后両陛下と天皇・皇后両陛下の姿勢が、私を感動させるばかりである。それに、百済系統の(現皇室の)神道でさえ、環太平洋地域のシャーマニズムの一つだった時代があるのである。

それにしても、元を辿れば、ヤマトタケル(倭建命・日本武尊)も、その母も、配偶者たちも、応神天皇の妃も、仁徳天皇の妃も、雄略天皇が奪った稚媛も(吉備との最終戦争・吉備氏の乱の原因)、吉備伽耶王国出身であった。畿内の大王(天皇)が何度も吉備に夜這い・品定めに行ったと『記紀』までもが記録しているのである。

古代吉備の女性・巫女たちは、とにもかくにも、常時ヤマト王権の男系男子大王たちの嫉妬と羨望の対象であり、とりわけ、身体的・性的結合によってその鬼神道的・霊媒的体質を自身の身体に借りることで強権的な列島支配の正当性の根拠としたり、あるいは、列島統一後にもその呪詛を恐れて身体的・性的に制圧すべき対象だったのだと見るほかない。そして、吉備王権・吉備豪族の力と、吉備の特殊器台・特殊壺(原始埴輪)や吉備たたら製鉄の技術は、ヤマト王権が何としてでも奪い取るべきターゲットであった。

鎌倉仏教の法然や栄西が岡山出身であるのはもちろん、幕末三大新宗教のうち二つ(黒住教、金光教)や、天理教分派のほんぶしん、不受不施系日蓮宗(日蓮講門宗や日蓮宗不受不施派)、日本救世軍など、反大和朝廷、反幕府・外様大名系、反明治政府系宗教・教派神道は集中的に岡山県で発祥している。そして、ある意味では、虚も実も含む日本史上最大の新宗教「国学」の大成者・平田篤胤は、出羽出身であるにもかかわらず、備中松山藩にその奇才を認められ、その藩士で江戸にいた平田藤兵衛篤穂の養子になっており、備中松山藩士らから聞く吉備の太古神道を起点に、これを雄々しく作り替えることで復古神道を大成している。この学派は、のちに「秘教神道」や「神道霊学」と呼ばれ、その後継団体のほとんどは山陽地方、しかもとりわけ岡山県に存在する。岡山県および県民に占める非神社神道系神道の教団と信者の数は、宗教の教団総数と人口で岡山県を凌駕する広島県よりも多い。

日本における吉備のこのような運命は、吉備人(岡山県出身者)の私の体感からするに、吉備と吉備人が半永久的に逃れられないものである。但し、今やこれらの新宗教は、神道や国学を誤解し、吉備土着の巫女たちを取り込んで、いいように利用し、巫女舞をさせている。各教団の商業主義化に伴い、靈感商法の宣伝などに巫女の神秘性を利用している場合もある。しかしそれは、私から見れば真の神道・国学や巫女舞ではない。山口県の神道霊学団体である神道天行居の集団儀式などには、吉備王国系(岡山、広島、兵庫)の巫女も参加したことがあるが、これが果たして古神道と言えるかどうか、私の周囲の巫女たちも私も甚だ疑問を持っている。自ら非神道を標榜するに至った天理教や分派のほんみち、ほんぶしんなどは言うまでもなく、黒住教、金光教についても、神道であると見ている巫女は少ない。

このような歴史には、改めて郷里岡山県と山陽地方・吉備王国(岡山県、広島県、山口県、兵庫県)に対する私の関心、とりわけ吉備王国(縄文人・初期～中期弥生人、吉備・新羅・熊襲・隼人連合)とヤマト王権(朝鮮・百済系最末期渡来人)との関係のとらえ直しへのそれを呼び起こさせる。孝霊天皇の第三皇子とされる彦五十狭芹彦命(ヒコイサセリヒコノミコト)すなわち吉備津彦の伝説も、新たなとらえ直しが必要である。

ヤマト王権が吉備を支配下に置くにあたり、吉備の女性・巫女たちを次々と妃・妾にしていることから、男系男子のヤマト王権が成立する以前から、吉備には後期弥生系・縄文系の母系・女系女子の巫女共同体があったことは明らかである。これを、吉備の男臣・男衆たちや、一足先に吉備に辿り着いていた渡来系秦氏などによる、太陽信仰と吉備製鉄の営みが支える構図である。「真金(まかね)吹く吉備の中山帯にせる細谷川の音のさやけさ」の歌が懐かしく思える。むろん、奈良時代の男系女性天皇の乱立も、ヤマトでさえ太古の昔には、巫女の祭祀が生活の中心である時期があったことを意味する。

ここではまず、岡山県の巫女神道家の祭祀・秘儀に伝承されている吉備・倭国の歴史や現地の発掘調査の結果と、ヤマト王権連合(最末期弥生人・朝鮮系渡来人)が文献(『古事記』、『日本書紀』などの六国史、『新撰姓氏録』、『古今和歌集』など)で主張している歴史との対応・相違を図示する。別掲の『歌道総覧』や神道関連の文章をお読みいただくにあたり、この図が大変有用になるだろう。

岡山県・山陽地方(吉備王国)などのシャーマニズム・アニミズム系巫女神道家の祭祀・秘儀が伝承している歴史、ないし実際の歴史(発掘調査・出土などによる史実)	
20万年前	ホモ・サピエンス誕生
12万年前	→→ 渡来人(旧人・デニソワ人)の日本列島への到達(琉球・九州方面と樺太・北海道方面から) ←←
4万年前	→→ 渡来人(現生人類)の日本列島への到達、旧石器時代、先石器時代(琉球・九州方面と樺太・北海道方面から) ←←
B.C.14000	縄文時代(中石器、新石器時代) ※ 列島人口の8割は東北地方に集中するが、のちの吉備王国の中心地域(岡山県と広島県東部)には、先石器時代の遺跡や貝塚、縄文人骨が集中。黒島貝塚、黄島貝塚(瀬戸内市色久町)、彦崎貝塚(岡山市南区、旧瀬崎町)、西岡貝塚(倉敷市)、津雲貝塚(笠岡市)など。
B.C.5300	鬼界カルデラ大噴火(鬼界アカホヤ火山灰の堆積)で九州南部・日向から縄文人が東方や朝鮮半島(この時は半島は無人)へ大移動。宮崎県の農家の「アカホヤ」の証言で調査が進んだ。縄文人の丸木舟も半島南岸で発見。(以後4000年間、九州南部で縄文文化が途絶える。半島への避難民は、のちに現地の民と混血し、三韓・新羅を建国。日向でなく出雲や吉備へ帰還か。日向へは百済王族一派が渡来か→後述の事実上の「天孫降臨」)
B.C.5000	沖縄は縄文時代の延長である貝塚時代へ移行 縄文時代の列島人口は2万~30万人を乱高下。8割が東北・関東に集中。
B.C.10c	→→ 渡来人(主に朝鮮系)の到達、兵庫県以西が弥生時代へ移行 ※ 吉備では、のちの造山・作山古墳周辺で広大な稲作を開始。百間川遺跡(岡山市中区)、南溝手遺跡(総社市)、長縄手遺跡(備前市)
B.C.5c	→→ 渡来人(主に朝鮮系)の到達、大阪・京都から北関東が弥生時代へ移行。東北北部・北海道を除く列島民全体が弥生人(正確には縄文人と弥生人の混血)に入れ替わる。
B.C.4c	青銅器文明へ移行(九州から北関東)、北海道は続縄文時代

B.C.2c	九州、四国西部	山陰	山陽、兵庫県西部、四国東部	兵庫県東部、畿内	中部、東海、関東、北陸
B.C.1c	広形銅矛 祭器園	中綴形銅剣 祭器園	平形銅剣祭器園	近畿式突縁組式銅剣祭器園	三遠式突縁組式銅剣祭器園
B.C.57	渡来系王国?	渡来系男王国?	女王(日の巫女)を男臣・巫女らが支える縄文系巫女連合王国?	女王(日の巫女)を男臣・巫女らが支える縄文系巫女連合王国?	女王(日の巫女)を男臣・巫女らが支える縄文系巫女連合王国?

A.D.0	吉備墳丘墓文明圏				
A.D.8	近年の発掘調査などによる解明の現状				
2c	<p>岡山県(旧吉備王国系)の女系巫女神道が家伝・家宝(秘伝・秘儀を多々含む)に基づき主張している内容。</p> <p>●吉備は、新羅や九州の熊襲・卑人と共に反ヤマト連合を結成するまで、三韓や前漢、王莽の新と組んでいた。</p> <p>●墳輪は、吉備の巫女の最古級の古墳に配置された墳輪も、ヤマトが考案したものではなく、吉備発祥の神道祭祀のものであり、正確には「特殊器台・特殊壺」と呼ぶべきものである。これら特殊器台・特殊壺は元来、吉備の首長の埋葬祭祀や巫女の祭祀・儀式などに用いられた。また、相當(あいなめ)や直会(なおらい)の祭祀にも用いられたが、これら吉備の祭祀をヤマト王権が東征時に吸い上げて畿内で整備したものが、新嘗祭・大嘗祭である。赤色顔料を用いたヤマトの王の葬儀も、吉備の王の葬儀の手法をヤマト東征勢力が吸い上げたものである。また、岡山県の巫女に残る神剣演舞や鳴釜神事は、原始朝鮮系の銅矛演舞や縄文系の巫女神楽を吉備風に変えたもので、ヤマト・畿内の銅鐸文明よりも古式である。</p> <p>●ヤマトの大規模前方後円墳も、吉備の大規模前方後円墳(造山古墳など)を模倣し、その技術を取り込んで造営されたものである。それらには、菅田御廟山古墳(伝応天天皇陵)、大仙陵古墳(伝仁徳天皇陵)、上石津ミサンザイ古墳(伝履中天皇陵)などが挙げられる。</p> <p>●原始神社は、その前身「姫社(ひめこそ)」として吉備(総社市福谷・養や瀬戸内市牛庭町)で発祥した。さらにそれ以前</p>				

ヤマト王権(大和朝廷)が右記文献などで記述・主張した歴史(『古事記』、『日本書紀』などの六国史、『新撰姓氏録』、『古今和歌集』)

考古学上は、高千穂に降臨したニギハヤヒ(天孫はオランウータン、チンパンジー、アウストラロピテクス、ホモ・ハビリスなどであったことになる(現生人類ばかりか、ホモ・エレクトスやネアンデルタール人すら誕生していない)、ヤマト王権による『記紀』神話の捏造は明らかだが、吉備など「元伊勢」が多数残っており、後期・末期弥生人である朝鮮系百済人勢力(ヤマト勢力)が、土着(縄文系)の筑紫や吉備を征服しながら畿内を目指して東進したことは、ほぼ史実であると推定される。

同様に言語学上は、スサノオの日本初とされる和歌「八雲立つ〜」は、現生人類もその言語も存在しない時代に詠まれたことになり、やはりヤマト王権による捏造は明らかだが、ヤマト王権(畿内)の言語・定型詩文化よりも出雲・吉備の言語・定型詩文化が先行して発祥し、これらがヤマトによる出雲・吉備征討で吸い上げられていわゆる「倭(和)語」や「倭(和)歌」となったことは、左記の埴輪や青銅器祭器、原始神社・鳥居の形状の伝播ルートと合わせても、確実であると考えられる。

B.C.200万~180万年

葦原中国 ← 出雲神話

スサノオによる和歌の発祥(「八雲立つ〜」)、大國主神の国造り

葦原中国

日向(高千穂) ← 「藍族」熊襲が跋扈する日向(日向かいの國、熊襲)に降臨

天孫降臨 ← 天孫紀元0年

日向への降臨から179万2470年後、神倭伊波礼昆古命が東征を思い立つ。↓ 出雲

葦原中国(国津神が治める地上界)

筑紫 神武東征 → 吉備

B.C.660

神武天皇即位(神武東征完了) → 神官(伊勢)

(神々・天皇の異様な長寿命や年月の極端な経過と、神武東征の単発的な勢いや神武即位の短期間の成立とに、整合性がない。)

神別天孫(氏)族(アマテラス、ニギハヤヒ直系血統、特にニギハヤヒから三代以内に分かれた氏族)

神別天神(二ニギハヤヒ天孫族に付き従った神々の子孫)

神別地祇系氏族(天孫降臨以前から葦原中国に土着していた神々の子孫)

諸蕃系氏族(ヤマト王権から見た「蕃族」)およびその他全ての日本列島土着・縄文系(「藍族」)と諸外国人

※ 実際は、皇統血統・葛城氏、平群氏、巨勢氏、蘇我氏のほうが後続の朝鮮(百済)系渡来人で、秦氏は吉備製鉄を主導し(総社市福谷・養や瀬戸内市牛庭町)で発祥した。さらにそれ以前

は、吉備・山陽地方(岡山、兵庫、広島、山口)の冠木門で、二柱は男女・雌雄を表した。さらに遡ると、その原初形態は朝鮮の紅箭門や東南アジアのトーテムポールなどで、女系女子シャーマンの祭祀施設である。

●和歌は、**出雲と吉備の巫女神道の言語活動・定型時部分(巫女神楽歌・巫女舞歌道)**をヤマト王権が真征時に吸い上げて発祥、畿内に定着した。ヤマトは、出雲や吉備が和歌発祥の地であることが氣に入らなかつたため、ヤマトに反抗した出雲の民の象徴、スサノオが初の和歌を詠んだこと(『記紀』)。また、出雲と吉備の巫女神道では、巫女らが神々と和歌を交わし託宣する神懸り神事が行われてきたが、近代に至って明治政府は、巫女禁断令(1873、教部省発布、神霊の憑依などによって託宣を得る行為の禁止)や社家の世襲の廃止令を下し、巫女祭祀の根絶を命じた。

しかし例えば、吉備(岡山県・山陽地方)の笛字(「高田(たかた)」、「山崎(やまさき)」など)が連濁しないのは、連濁がヤマト王権の氏姓制度以降に発生したからで、清音読み・非連濁の西日本方言のほうが古式の倭語である。倭語の母体(原始倭語)が吉備・山陽・西日本方言である根拠は、極めて多くある。

●青銅器文明のち、**吉備は列島最大の鉄産地であった**。飛鳥・奈良時代にヤマト王権に降伏したあとも、しばらくはヤマトの鉄文明はほとんど吉備王国の斜陽勢力(吉備の人々・製鉄人)が支えた。

●土器製塩も**吉備(児島)**で発祥した。畿内の製塩技術は、吉備発祥のものである。

葦原中国(日本列島の形容)

<p>→ 事実上の天孫降臨 → 弥生最末期渡来人の男王の軍勢が九州の上陸、まず日向あたりまでに定着か。</p>	<p>吉備墳丘墓・古墳、吉備製鉄(吉備たたら製鉄)文明圏(三韓・新羅系渡来人中心、在地吉備の民や九州の熊襲・卑人と同盟した反ヤマト連合。倭語の一方言)</p>	<p>毛野墳丘墓・古墳文明圏(三韓・新羅系渡来人。倭語の一方言)</p>
---	---	--------------------------------------

「倭」(中国側からの列島民・国の総称)、倭国大乱

鬼道を操る日の巫女の代表者(卑弥呼)を女王として即位させることで鎮圧(奈良時代の男系女帝も、内乱鎮圧の呪術指導者・巫女として臨時に即位)

<p>奴国 邪馬台国(九州説)</p>	<p>邪馬台国(出雲説)</p>	<p>邪馬台国(吉備説)</p>	<p>邪馬台国(畿内説、ヤマタイ=ヤマトが)</p>
---------------------	------------------	------------------	----------------------------

3c 一後続の朝鮮系渡来人(最末期弥生人)が日本列島に來望し、既存の渡来人を九州から山陽方面へ押し出す

3c 一後続の朝鮮系渡来人(最末期弥生人)が日本列島に來望し、既存の渡来人を九州から山陽方面へ押し出す

3c 一後続の朝鮮系渡来人(最末期弥生人)が日本列島に來望し、既存の渡来人を九州から山陽方面へ押し出す

古代三大墳丘墓・古墳文明圏(墳丘全)

墳丘墓、古墳、鳥居の形状は、のちの朝鮮・百済系・ヤマト王権のものよりも、東南アジア・環太平洋地域・インディアン・初期朝鮮のアニミズム・シャーマニズムの遺跡に近い(トーテムポール、マヤのピラミッド、紅箭門、冠木門など)。

畿内説は、特に倭姫命を女王卑弥呼に比定する場合に生じる。しかし、その場合、卑弥呼の祖父の崇神天皇による吉備の温羅征討の前に、卑弥呼が存在したことになり、不自然。あるいは、鬼の温羅(に当たる人物)を征討したのは吉備津彦ではなく、応神・仁徳・雄略天皇の軍勢そのものと見るか、元より鬼=温羅=吉備津彦=反ヤマトの吉備戦士で、吉備に鬼の圧政はなく、ヤマトの創作であると見るならば、矛盾せず、妥当。

その他の中小規模古代王権
古代日向(興・越系渡来人)
古代鳥懸(三國系渡来人)
古代畿連(三國系渡来人)

宇佐に立寄り

↓
二二ギ・神武(ヤマト)軍勢が熊襲の野蛮性を実感。以降、熊襲は征伐の対象として目を付けられる。
九州(日向、筑紫)

安芸に立寄り

高島に立寄り

神武天皇即位・ヤマト王権の確立を知って歓喜した吉備の人々が、地元鬼ノ城の温羅(鬼の勢力)の圧政を、遠路遠々ヤマトに密告、助けを求め。

吉備の石上布都魂神社に、八岐大蛇を斬ったスサノオの剣が移される。

左記の剣は、さらに崇神朝期に、吉備の石上社から大和の石上神宮に移される。

崇神天皇は、孝靈天皇の皇子、彦五十狹芹彦命(吉備津彦命)とその弟の若日子建吉備津日子命(稚武彦命。吉備氏の祖とされる)を派遣し、吉備平定を命じる。温羅(鬼ノ城)勢力が滅亡。
桃太郎(温羅、鬼ノ城、吉備津彦)伝説
※吉備の巫女神道道家、吉備津神社、神社本庁系神社神道の二者で、主張が異なる。旧派歌道一貫の解説を見よ。

一四道將軍による征討

一征討

一九州の熊襲など「蛮族」征討を開始

日本武尊、出雲と親対立を回復。

一征討

一征討

日本武尊が吉備の娘たちを妻とし、ヤマトの英雄として西征・東征で活躍。稚武彦命の子(孫)で、越国を視察していた吉備武彦から吉備の従者と美濃で合流。協力して、吉備や九州に残る熊襲などの「蛮族」を討ち滅ぼす。

日本武尊が病死。吉備

一「紀伊熊野・吉野に立寄り、南方から大和へ入る。

実在性に疑義がある天皇

欠史八代(額埴天皇～開化天皇)

ヤマト王権・崇神朝は、スサノオおよび出雲・吉備に反省を促すも、出雲・吉備は反抗。

B.C.88

崇神天皇(以降、最新の研究では実在する天皇。しかし、各天皇の寿命・崩御年齢は相変わらず異様に長寿で、非現実的。)

一四道將軍による征討

一征討

崇神天皇系皇別氏族

吉備との強力な血縁関係による吉備懐柔策を開始。(吉備の姫を妃や妾とする。応神・仁徳・雄略朝期に完成。温羅または吉備津彦による吉備王国の圧政が崩壊。妃たちや吉備の人々は喜んだとする。)

皇統(王、大王、大君、治天の君)

中(など)、吉備の「姫社」系巫女神道と協力体制を築く。

4c	長200m以上の王国	九州北部がヤマト王権支配下に、王権は宗像市の沖ノ島にも到達し、祭祀がヤマト型となる(宗像大社の起源)。在地の筑紫人は筑紫王国として抵抗。	ヤマト王権が、●吉備の巫女の祭具「特殊器台・特殊壺」を模造し、かつ祭具の役割を排除し、男系王権詩示の道具「埴輪」として利用。やがて、大和で築いた大規模古墳に配置。のち、吉備の相嘗や直会を新嘗祭・大嘗祭として実施。吉備の王の葬儀を模倣してヤマトの葬儀とする。 ●吉備の「姫社(ひめこそ)」を「神社(じんじゃ)」として大和で整備。特に総社市秦付近で吉備の人々と協力して吉備製鉄を営んでいた渡来系氏族・秦氏の力を借りる。鳥居の形を変更。あらゆる神社神道の元となる。 ●吉備(特に牛窓、黒島、黄島、瀬崎辺りの言語)、「倭語」、「倭歌」として整備。大和で「吉備」の地名が残る。 ●先に吉備に住み着いた秦氏と在地の人々が築いていた吉備製鉄の技法を吸い上げたほか、ヤマトへの鉄の献上を命じる。	言語学上は、ヤマタイ=ヤマトで連続・同一言語と判明している。渡来人(百済系弥生人)勢力が邪馬台国を征服して「ヤマト」の国号を吸い上げたか。あるいは、邪馬台国自体が東征しながら筑紫、出雲、吉備を滅ぼし(または建国しながら)、ヤマトとして畿内に定着か。いずれにせよ、この間、女王から男王政権に転換。	来人)、古代越(三韓・新羅系渡来人)、古代毛野(三韓・新羅系渡来人)
	4c前半朝鮮半島で百済建国。百済王族も含めて列島へ渡来するようになる。百済は、三韓の馬韓が母体か、または高句麗王族の一派が建国か。			杵築大社(出雲大社)の建設	ヤマト古墳文明圏(百済系渡来人、倭語の一方言) →今度は畿内から西方へ進軍開始。吉備津彦などの四道將軍を送り込んで征伐。生き残った巫女をヤマトの王の妃や妾として奪い、連れ帰る。または、夜這いをしに吉備へ急襲、これが定期化。勢力を急拡大。東方・毛野・蝦夷へも進軍。→
5c	吉備で仏教私伝(私的信仰)と神仏習合が始まる。	(三韓・新羅系渡来人中心だったが、すぐに百済系渡来人中心に移行、早くからヤマトの傀儡王権となる。倭語の一方言)	温羅、鬼ノ城、吉備津彦・橘太郎伝説(親おかやま橘太郎まつり、うらじやの由来) ※吉備の巫女神道、吉備津神社、神社本庁系神社神道の三者で、主張が異なる。日本武尊(建部)にまつわる伝説(「建部」の地名の起源など)も同様である。旧派歌道一覽の解説を見よ。		
	古代筑紫王国(筑前、筑後) 現福岡県	古代出雲王国(出雲、石見、伯耆、因幡) 現島根県、鳥取県	古代吉備・吉備加耶王国(在地縄文系吉備人、備前新羅、備後百済、久米高句麗の連合王国)(備前、備中、美作、備後、安芸、周防、長門、播磨、讃岐) 現岡山県、広島県、山口県、兵庫県、香川県	ヤマトに対抗し、当時埴丘規模第二位の古墳文明を築く。(第一位は吉備。)	

神功皇后軍による熊襲襲撃(熊襲征伐完了)	一征討	一征討	の妃となり、吉備で日本武尊を産む。	武産が遺言を景行天皇に伝達。	仲哀天皇・神功皇后の軍勢が熊襲を襲撃。天皇崩御後、遺志を継いだ皇后軍が征伐を達成。	皇族・臣籍降下	葛城氏、平群氏、巨勢氏、和氣氏、蘇我氏、橘氏、紀氏、清原氏、小野氏など	和邇氏、吉備氏など	菅原氏、大江氏など	大伴氏、大中臣氏、藤原氏など	秦氏など
一征討	一征討	一征討	稚武彦命の娘らが日本武尊の妻となる。	一征討 息長宿禰王と新羅王子天日矛裔・葛城高麗媛との間に氣長足姫尊が産まれ、仲哀天皇妃・神功皇后となる。	一征討 その後も、応神・仁徳天皇ほか歴代天皇・皇族は、仄政下の吉備の人々を救うことを名目として、吉備に軍勢を派遣し侵略。吉備の姫を妃や妾として迎える。(実際は、吉備の男性と既婚であった女性たちを強奪。)						
一征討	一征討	一征討	妃たちと吉備の人々は喜び、吉備はヤマトとの血縁関係はヤマト軍勢の方で安定していったとする。	一征討 一応神朝期、百済から弓月君が渡来し、百済の民の窮状と新羅による渡来妨害を訴える。応神天皇、葛城襲津彦、平群木菟の援軍により、弓月君の民が渡来に成功。	一征討 吉備武彦の子らが吉備氏一族を形成。しかし、この中からまた反ヤマト勢力が出て、吉備氏の乱(吉備下道臣前津屋の乱、吉備上道臣田狭の乱、463)などを起こす。 『日本書紀』は、田狭が妻の吉備稚媛を朝廷で自慢する暴挙をしたため、田狭が任那に出兵している間に雄略天皇が妻を奪ったところ、田狭が怒ったのが原因と記す。)						
ヤマトに抵抗一磐井の乱(527~528)など	一征討	一征討	出雲族南進(吉備とヤマトの王権中枢に入る)		一征討 一雄略天皇は、そのまま吉備稚媛を妃に迎え、軍勢規模を拡大して吉備に出兵し、乱を鎮圧。歴代天皇は、吉備の姫たちを妃や妾として奪い、朝廷で厚遇し、吉備の男王・男臣らを怒らし、筑紫、出雲、吉備王権の横暴から人々を救ったと記す。						

筑紫勢力の大部分は、親ヤマトの立場へと転向する。

吉備でも特殊舞台・壺が消滅し、埴輪に移り、神宮寺山古墳など、大規模の前方後円墳が増加。5c初頭には、当時全国最大の造山古墳を造営、ヤマトに先行する全国最大の古墳文明となる(第二位は毛野)。続いて作山古墳、小造山古墳、両宮山古墳などを造営、いずれも(歴史学者や学会の立入許可・調査要求を国・宮内庁が拒否しているため)本格的な発掘調査は実施されておらず、誰の陵墓であるか(宮内庁の天皇陵治定が正しいか)については諸説ある。

まず当然、ヤマト政権と双璧を成した吉備政権の首長の陵墓であるとする説がある。一方で、吉備の首長でなく、ヤマトのいずれかの首長すなわち大王(倭の五王など)の墓で、圧政の吉備を征討した大王を称えて現地の人々が造営したものとする説がある。これは国、宮内庁、文化庁、保守系団体、そしてこれらに氣を遣っている現在の岡山県などに見られる主張である。

しかしさらに、造山古墳蘇生会や就実大学の出宮徳尚非常勤講師(元岡山市教育委員会文化財課長)、一部の歴史学者らは、造山古墳こそ応神天皇陵であり(菅田御廟山古墳は応神天皇陵でない可能性が高く)、応神天皇は皇位(大王位)に就いた吉備の元首長で、かつ倭の五王の最初の王「讀」であると提唱する。

本資料の作成者岩崎も、概ねこの説を採る。但しその場合でも、応神天皇が皇位に就いてすぐ(父・仲哀天皇と母・神功皇后による吉備侵略を継承したことは変わらない)であり、(吉備にとどまらずままた畿内に入って)軍勢を指揮し、右記や別掲の系図の通り吉備の巫女らを降参して祀としているのであるから、早期からヤマト側に寝返っていたことは確実である。吉備を守護する吉備人の首長は、また別に存在・登場したと考えられる。

いずれにせよ、どの説を採っても、当初、大規模前方後円墳の築造技術は吉備と毛野しか持っていなかったことになる。

吉備が新羅や伽耶、九州中南部の先住勢力(熊襲、隼人)と同盟し、ヤマトの支配拡大に反撃。ヤマト・筑紫連合軍の征討に遭っていた熊襲に援軍を出すも、熊襲は壊滅状態に。

造山古墳からの出土と考えられる石棺には、阿蘇凝灰岩が使われている。また、その陪塚の石室は、九州中南部に特有の構造で、これにも九州・四国産の石が使われている。さらに、陪塚から出土した馬形帯鉤は、百済ではなく伽耶か新羅のものと推定される。吉備は明らかに、九州北部の筑紫勢力やヤマト、百済との衝突を可能な限り避けながら、同盟した熊襲や隼人を通じて、伽耶・新羅と同盟・交易している。

これらのことから、古代筑紫の親ヤマトとしての立ち位置は明白であり、ヤマト・筑紫・百済連合と吉備・熊襲・隼人・伽耶・新羅連合との対立の構図があったことが分かる。

当時全国最大の造山古墳など、吉備の前方後円墳の技術を元に、これを上回る菅田御廟山古墳(伝応神天皇陵)、大仙陵古墳(伝仁徳天皇陵)を造営。上石津ミサンザイ古墳(伝履中天皇陵)も同様と考えられる。造山古墳が墳長で第四位となる。

このほか、造山古墳よりも築造時期が遅いヤマトの大規模前方後円墳には、仲ツ山古墳(伝仲姫命陵)、土師ニサンザイ古墳(陵墓参考地・伝反正天皇陵)、田出井山古墳(伝反正天皇陵)、岡ミサンザイ古墳(伝仲哀天皇陵)、市ノ山古墳(伝允恭天皇陵)などがあり(全てが百舌鳥・古市古墳群に含まれる)、いずれも吉備の技術を取り入れて築造された古墳である。

また、いずれも(歴史学者や学会の立入許可・調査要求を国・宮内庁が拒否しているため)本格的な発掘調査は実施されておらず、誰の陵墓であるか(宮内庁の天皇陵治定が正しいか)については諸説ある。

戦後、国、宮内庁、文化庁、大阪府、京都府、奈良県、保守系団体などは、ヤマトの上記三大古墳などの主な前方後円墳が造山古墳に先行するかのよう(伝)に宣伝し、岡山県もこれに屈したが、これは史実と反していることが判明しており、少なくとも菅田御廟山・大仙陵の両古墳は造山古墳より後のもので、上石津ミサンザイ古墳についても、左記の造山古墳蘇生会、就実大学の研究者、元県教育委員会文化財課などによる研究で、同様であることが明らかになってきている。

しかし最近では、国・宮内庁の手前、「当時の天皇(特に倭の五王)に吉備(非ヤマト系)の首長がいた」といった左記のような推定は、たとえ高い確証が得られたものであっても、県・県教委も県の大学も市民団体も取り下げている。

この流れの中、国、宮内庁、文化庁、大阪府などはたらきかけにより、2019年、百舌鳥・古市古墳群は世界文化遺産に登録された。イコモス調査・評価では、「仁徳天皇陵」などとほぼ断定的な推薦書を提出した日本に対し、一部の専門家がその天皇陵治定に疑念を持ったが、最終的には非常に円滑に調査を突破した。

ヤマトの勢力が急拡大、吉備を逆転
→ **暫定的に日本の王(日王)としての覇権確立**

熊襲征討
日本武尊軍や仲哀天皇軍が九州南部の熊襲を襲撃、神功皇后軍が征討完了。

三韓征伐(新羅征伐)
神功皇后が朝鮮出兵。親新羅の出雲・吉備を率制。一方、皇后軍自らは吉備産の軍船を奪って利用。また、吉備の防人を騙して同じく軍船で新羅を攻めさせ、吉備を疲弊させる。九州の隼人も吉備産軍船で致し方なく加勢。新羅は降伏するも、吉備、熊襲、隼人と共に反撃体勢を整える。

ヤマトの墳丘規模が全国最大となり、吉備が第二位、毛野が第三位となる。

一 征討

一 征討

一 征討

一 征討

一 征討

一 征討

一 征討

欠史十代(仁賢天皇~推古天皇)
(実在し、帝紀も存在するが、事績が不明。)

6c	<p>吉備の石上布都魂神社に、八岐大蛇を斬ったスサノオの剣が移される。出雲は、ヤマトに征服されていく吉備の状況を傍観。</p> <p>一方、御友別のように、ヤマトに取り込まれて協力する吉備戦士も出てくる。</p> <p>左記の剣は、さらに崇神朝期に、吉備の石上神社から大和の石上神宮に移される。出雲・吉備の巫女神道が、ヤマト王権で作られ替えられ、物部氏系祭祀となる。(吉備石上宮司家は物部姓に戻しており、他の同社・周辺神社の社家にも物部姓あり。)</p> <p>吉備でも古墳の中小型化が始まる。</p>	<p>ヤマトでも古墳の中小型化が始まる。</p> <p>古代ヤマト王権連合(大和、山城、河内、摂津、和泉) 河内・奈良県、京都府、大阪府</p>	<p>← 征討</p> <p>← 征討</p> <p>← 征討</p> <p>← 征討</p> <p>吉備王国がヤマト王権に屈服。吉備氏や和氣氏が完全にヤマト連合の中核部に入る。</p> <p>← 征討 (以降、百数十歳を超えていた天皇の崩御年齢も、現実・史実に近づいてくる。)</p>	<p>推古天皇が初の女帝に。その後、奈良時代に女帝即位。(ヤマトの男系男子皇統を支える女帝・皇族女性の巫女性、吉備の女系女子(皇后血統)の巫女性に対する優位性の最終確認。)</p>
朝鮮から仏教公伝 562 伽耶・任那滅亡	<p>古代筑紫の一部がヤマトに抵抗→出雲族南進→ヤマトの王権中核に入る(527~528)など</p> <p>ヤマトに抵抗→吉備氏の乱(吉備下道臣前津屋の乱、吉備上道臣田狭の乱、463)など新羅および熊襲、隼人と同盟して造船。水軍を整備して進軍するも、敗北。</p> <p>ヤマトに抵抗→吉備津彦命系氏族として処遇。吉備に屯倉(みやけ)制や郡民(べのたみ)制を真っ先に敷き(白猪屯倉、児島屯倉など)、畿内ほか全国に適用できるかを実験。屯倉・三宅・宮家・宮宅(みやけ)の苗字が岡山県に集中的に残るのはこのため。</p> <p>吉備で群集が増加。吉備の実状を踏まえれば、吉備の首長や近臣らの墓かどうかは不明で、ヤマトの現地勢力の者の墓か。一方、装飾古墳は九州、山陰、畿内、関東、東北で盛んに造営されたが、吉備では極端に数が少ない。</p>	<p>関東・東北に征東大將軍・征夷大將軍を派遣し征討。</p> <p>毛野、東北、北海道の古墳で埴輪が盛んに用いられる。</p>	<p>ヤマト以外の古代王国が滅亡(筑紫、出雲、吉備のそれぞれの王の王政により、人々は苦しんでいたが、ヤマト王権が送り込んだ軍勢により、各王国は滅ぼされて平和が訪れ、人々は喜び、以後、統一ヤマトの民として幸せに暮らした。)</p>	

これ以降、日本列島の歴史(日本史)は、すなわち天皇勢力支配下の歴史として記述される。

7c 660 百濟滅亡 668 高句麗滅亡	<p>古代ヤマト王権連合→大和朝廷 扶余・高句麗・百濟系渡来人の優遇(奈良日本語)による列島言語の統一(統一日本語の成立) (実際は、天皇・皇族・朝廷勢力のほとんどが百濟王族系で、大多数の日本国民よりも遺伝的に縄文人から遠く、琉球民族・アイヌ民族が遺伝的に最も縄文人に近い。)</p> <p>朝廷が吉備大宰府を設置。(吉備王国中心部を備前、備中、備後に分け、のちに備前から美作を分離。吉備系巫女神道の拠点であった神奈備山の「吉備の中山」を備前と備中に割ることで、吉備の人々の分断策をとる。また、石川王などの皇族・吉備大宰を中心とする軍勢が謀略による吉備の砂鉄資源強奪の指揮を執る。以後、吉備津彦を奉じた反乱を諷めた吉備製鉄人たちが、朝廷への鉄貢納を開始。)</p> <p>乙巳の喪・大化の改新(645) 白村江の戦い(663):唐・新羅連合軍との戦闘。百濟復興戦争。吉備の残党は天智天皇の朝廷軍・百濟軍に加担せず、九州の熊襲・隼人と組んで進軍を妨害。</p> <p>征東大將軍・征夷大將軍による東方・北方(蝦夷・アイヌ)の征討</p> <p>天智天皇の即位(668) 壬申の乱(672) 天武天皇の即位(673)</p> <p>天武朝において(可能性の極めて高い推定)、ヤマト王権(大和朝廷)の王・大王・大君の呼称を「天皇」に。國号を「日本」に。</p> <p>大和朝廷が歴史の記述を開始 →</p>	<p>古代ヤマト王権連合→大和朝廷 (天皇・皇族・朝廷自らは高天原の出自主張。桓武天皇の母系遠祖(百濟武寧王)など、一部にのみ百濟王族の遠縁の血筋を認め、百濟王族系氏族などを「皇別」や「神別」から区別して「諸蕃」と規定。現上皇陛下は2001年に、これに関連して「韓国とのゆかり」発言を行ったことがある。)</p> <p>全古代王国を大和朝廷支配下へ編入</p> <p>天智・天武朝</p> <p>女性天皇(男系女帝)の即位が缺く 確認できる限り、全ての女性天皇は男系で、かつ内乱鎮圧・国家平定や前権力者の怨讐制圧のための呪術指導者・巫女として臨時に即位させられており、天皇は元来あくまでも男系男子に限るという意識の萌芽が見られる。但し、後述の道鏡の例の通り、万世一系の確立はまだない。(万世一系を謳ったのは崇神天皇とされるが、伝説の域を出ない。)</p> <p>天皇であった夫や父の崩御による妻や娘の皇位継承は、とりわけ臨時的な継承であるが、それとて巫女としての能力を期待された即位である。</p> <p>また、崩御した息子から母、そして妹への皇位継承と女帝の重祚は、その呪術的能力に対する皇族男子や男臣らの期待のあらさまな現れである。</p> <p>前者の例としては、文武天皇から母の元明天皇、次いで妹の元正天皇への皇位継承が挙げられる。これは、吉備女系巫女神道への皇位差差しをも意味した。</p> <p>後者では、前皇極天皇の斉明天皇としての重祚は、中大兄皇子らが自らが討った蘇我氏の怨念を恐れて画策・実現したものである。</p> <p>斉明天皇の役割はあくまでも巫女で、実権は中大兄皇子にあり、最大の目的は自身の即位であった(天智朝)。</p>
-----------------------------	---	--

8c	天皇・大和朝廷による東西征討の完成期	完全に大和朝廷・近衛兵の一員となった吉備氏(吉備真備が全盛)や和氣氏(和氣清麻呂が全盛)は、反新羅に転じる。吉備真備は対新羅防衛のため怡土城を築城。但しこれは、藤原仲麻呂による真備左遷策の一つでもあった。吉備真備は、朝廷に対する反乱(藤原仲麻呂の乱など)の鎮圧に尽力。墓を畿内に営む(吉備塚古墳)。「吉備」の地名が畿内にいくつも残る。また、和氣清麻呂は、光仁・桓武朝での大規模な治水工事・建都事業に尽力。	琉球・奄美・先島・東北部・北海道を除く日本列島全土を征服(琉球民族、一部の熊襲・隼人、アイヌ民族などは列島両端に退避し、近世まで抵抗。特にアイヌは近現代まで抵抗、日本政府は「土人」と呼んで制圧と保護を反復。)	朝廷が東方に渡来系移民を移住させ、朝貢させつつ、自治を与える(高麗郡の設置など)。	聖武天皇が吉備産の瓦を使って東大寺建立。備前・備中・備後など吉備各国における朝廷主導の国分寺の建立や一宮の整備により、王国・王朝としての吉備は完全消滅。	【古事記】(712年)、【日本書紀】(720年)を編纂(史実と虚構を折衷)	【万葉集】(780年前後)を編纂(万葉仮名)	智大星)。 前孝謙天皇の称徳天皇としての重祚、武力による淳仁天皇排撃においては、公卿・男臣ら(藤原仲麻呂、和氣王、道鏡、弓削浄人、和氣清麻呂)が、立場は異なれど、女帝の巫女性(霊媒体質・神託受信体質)を恐れ、あるいは利用した点で、注目すべきである(藤原仲麻呂の乱、宇佐八幡宮神託事件)。 男臣らは、あくまでも道鏡など男臣のいずれかが皇位に就くことを画策し、称徳天皇については、その巫女性のみを都合よく利用している。孝謙・称徳天皇派には吉備真備や和氣清麻呂がおり、これは吉備の女系巫女神道の呪術の技法を男系女帝に適用しようとした例でもある。 弓削氏の出である道鏡は当時、男子の託宣者・霊媒たる「おかんざぎ(現・男巫)」の一人であり、この時点で、皇位には、女系女子はもちろん、前天皇直系血統の女子でさえなく、血統を問わない男系男子(とりわけ、呪術に基づく武力に長けた男子)が就くべきとされていたことが分かる。 称徳天皇は日本史上唯一、出家のままで即位しており、その霊媒体質の再利用が急務であったことを物語る。一方で、すぐに天皇家は万世一系であるべきとの思想が生じ、道鏡の立場も通用しなくなる。この時に群臣らが用いた手法は、称徳天皇の遺言なるものであり、もはや女帝は利便な託宣祭員にすぎなかった。 この内乱・女帝即位期を通じて、孝謙・称徳天皇のみならず、和氣広虫、紀益女、幸嶋勝与曾女など、周囲の巫女は都合よく男子天皇・男臣らに託宣させられ、あるいは託宣を「捏造」されている。 これをもって女帝乱立期は終焉を迎え、江戸時代まで女帝は出ないが、その明正天皇・後醍醐天皇もそれぞれ崇徳事件、空位事件の巫女・呪術者としての処遇を期待されたの同時であった。明正天皇は踐祚時、わずか7歳の幼女であった。 歌道総覧の巫女神道、斎王などの解説も見よ。	【新撰姓氏錄】(815年)を編纂(史実と虚構を折衷)	【古今集】(905~912年頃)を編纂(序で史実と虚構を折衷)	【天皇】の王号、「日本」の国号成立以降の皇族・臣籍降下(源氏、平氏など)
		奈良後期から平安初期にかけて、ヤマト王家(天皇家)の血統が百済系一統となり、新羅の血統がなくなる。									
		大和朝廷が各氏族・列島民を右の通り振り分け									
		六国史が完成									

→ そのまま右へスライド →

日本列島先占原住民、縄文人、太古弥生人(琉球民族、熊襲、隼人、アイヌ民族、出雲族、吉備族、毛野族)		非先占末期弥生人、朝鮮・百済系渡来人(天孫族、ヤマト王権連合、豪族、軍事貴族) : 狭義の「大和民族」	
● 日本国民(広義の大和民族、戦前の大日本帝国の内地国民)			
建設した国家とその首長	古代筑紫、古代出雲、古代吉備など非ヤマト系古代王国(王、男王、女王)		ヤマト王権(大王)→大和朝廷(天皇・治天の君)→大日本帝国(王政復古、天皇大権・統治権総攬、立憲君主)→日本国(象徴天皇、事実上の立憲君主)
支配層の民族血統	概ね先占渡来人(先土器時代人・縄文人)と太古弥生人・渡来人(三韓・新羅系)の混血		概ね末期弥生人・渡来人(朝鮮・百済系)と左記弥生人との混血(現憲法下の選挙制確立以降は、為政者の血統不問。但し、天皇・皇族を除く。)
広義の日本神道			
現皇統(日本国)との関係	大和朝廷(現皇統)自体の神道である、または大和朝廷(現皇統)支配下で継承されている神道の系列 (但し、畿内も、ヤマト王権の侵入以前は巫女の王と巫女共同体による原始シャーマニズム世界。また逆に、ヤマト王権に取り込まれて中央豪族と化した吉備氏や和氣氏などは、男系神道に転向し、故郷の巫女神道と疎遠となった。)		
父母血統と系統	女系(母系)女王・巫女系神道 : 「神の道・惟神道(かんながらのみち)」「のちの神道」と「歌の道・巫女神楽」「のちの歌道」とは未だ不可分		男系(父系)男王・男性神職系神道 : 狭義の日本神道
祭祀の主導者(神道流派の宗匠)	肇頭巫女および巫女連合 (世襲巫女社家または地縁巫女共同体) (肇頭巫女は、女系一族の家長を兼ねる巫女、または男系男子で通れる男系一族の血統と無関係に通れる女系巫女)	女系男子(肇頭巫女の男臣)	男系皇族女子(内親王・女王) (必ず世襲) 男系一族(神官家・社家)の男子官司・禰宜・権禰宜(戦後は稀に女性) : 巫女禁衛令(1873)以後の狭義の日本神道(神社神道、皇室神道、国家神道、多くの教派神道)
祭祀の中心	神懸り神事(神人一体・シャーマニズム・神降ろし・憑依・化身型) 自ら日の巫女(卑弥呼)・シャーマンとして天之御中主神、国常立尊、天照大神、あるいはそれ以前の土着の女神となるものが真骨頂	奉納型祭祀(神人分離型) 神懸り神事(神人一体・シャーマニズム・神降ろし・憑依・化身型)	奉納型祭祀、現世利益的参拝・参詣(神人分離型、金運・仕事運・健康・恋愛などに関する「神頼み」の形式) 皇民・国民による「参拝・参詣」の形式をとる神道

現在の日本国民に占める人口	<p>巫女禁断令(1873)で表向きは消滅、教派神道などに強制編入 明治政府公称人数:0人、現在の実人数:およそ150人~200人 縄文系ムラ社会共同体から継続する女系女子の巫女神道・非神社神道が主体であったと考えられる。吉備の巫女神道社家では、その祭祀を秘伝化させて伝承。互いに少しずつ異なるものの、基本的には古代吉備伽耶王国系の秘宝・秘儀を保持。</p>	<p>日本では少数 左記の巫女や右記の齋王が亡くなった場合の祭祀の代行役が多い。</p>	<p>室町時代に消滅、戦後に形式的に復活 女人列・協力女性までを含めると、数百人 京都・近畿の上流男系一族の才媛を齋王代とし、これを男衆が担ぎ、女人列が従う祭祀を奏祭として開催し、皇族女性を伊勢祭主とすることで、形式のみを再現している。齋王代は、神懸り神事や旧派歌道を行わない。</p>	<p>日本国の主流 9000万人~1億2000万人 一方、旧譜書氏族のみならず皇統および旧天孫・天神系氏族で末期弥生渡来系すなわち朝鮮・百済系優勢。 (但し、血統はほぼ縄文・弥生混血。沖縄・北海道で縄文優勢。) このうちほとんどの国民が明確な神道意識を持たず、同時に同程度の人口が事実上の仏教徒であると共に、仏教意識も神仏習合意識も持たず、無宗教であると自覚している。国学と現代の保守思想では、国柄/国体は万世一系・男系男子血統の大王(天武以降は天皇)が保証するものと見なされている。また、諸蕃(渡来系・朝鮮系)氏族は王権の中枢を担い、皇別・神別氏族も大半が朝鮮系渡来人であった上、2001年には上皇陛下ご自身が前述の「韓国とのゆかり」を仰せられたにもかかわらず、朝鮮民族排撃の思想が見られるのが、現代日本の特徴である。</p>
---------------	--	---	--	---

↓↓ これ以降、『日本旧派歌道流派総覧』の該当項目を見よ。統一ヤマト・統一日本語文明圏として、日本語による定型詩である和歌を中心に、歴史を追う。

(1) 巫女神道・原始日本神道・古道歌壇(縄文・弥生時代、列島先住日本人、太古の帰化渡来人)	(2) 齋王系・後期巫女神道系歌壇(末期弥生時代、朝鮮系・百済系帰化渡来人)	(3) 神社神道・近代社格制度下の古代神社・古道歌壇
(4) 山岳信仰・修験道・仏教・神仏習合歌壇		
(5) ヤマト王権・大和朝廷・現皇統勢力圏(大王・天皇の確立期から立憲君主制・象徴天皇制の現在に至るまで)の歌壇		

『日本旧派歌道流派総覧』の「流派の主体」に氏族を記載 一